Myanmar-Japan Collaboration Project for Fostering Medical Human Resources

ミンガラバー こんにちは

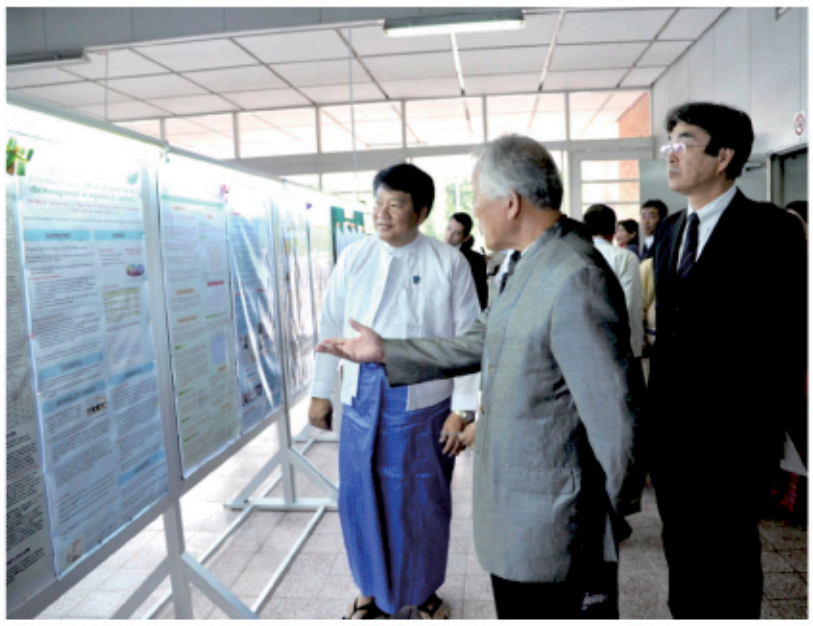
認定 NPO法人
日本・ミャンマー
医療人育成支援協会
〒700-0023
岡山県岡山市北区駅前町2丁目4番23号
TEL:086-224-0102
URL:http://www.mjcp.or.jp

岡山大・ミャンマー保健省の医学交流協定

連携強化を確認

10周年記念式典　学長ら出席

岡山大学とミャンマー保健省の医学交流協定締結10周年の記念式典が11月10日、ヤンゴンの同省医学研究局であった。これまでの研究や指導の成果を振り返りながら、今後一層、交流を深めていくことを確認し合った。



式の後、10年の歩みを展示したパネルを見るべ・テ・キン保健大臣（左）中央が岡田理事長、右が森田学長＝ヤンゴンの保健省医学研究局・槇野病院長撮影

式典には、岡山大から森田潔学長、槇野博史病院長、小川秀樹国際センター教授、木股敬裕教授（形成再建外科）、協会からも交流協定締結当時、医学部教授として中心的役割を果たした岡田茂理事長や永山久夫、前坂匡紀両理事ら、合わせて14人が参加した。ミャンマー側は保健省幹部や同省所轄の医療福祉系大学の関係者ら約100人が出席。このうち3分の1は岡山大学などへの留学生や研修生の経験があり、交流の広がりをうかがわせた。

挨拶で、ペ・テ・キン保健相が約20分にわたって、共同研究や医療支援についてくわしく触れ、「岡山大の貢献に感謝し、この協力を未来につなげたい」と述べた。森田学長は「これまでの信頼関係を大切にし、連携をさらに深めたい」と話した。

前日には、岡山からの一行はヤンゴン医科大学（Ⅰ）と同（Ⅱ）、ヤンゴン歯科大などを表敬訪問。ヤンゴン医科大（Ⅱ）ではちょうど卒業試験中で、問題、解答ともにすべて英語で行われており、英語教育の徹底ぶりに岡大関係者は驚いていた。またヤンゴン総合病院も視察。ここでは岡山で研修した医師が第一線で活躍していた。

岡山大とミャンマーの縁は、岡田理事長が教授時代の1996年に中心となって医療協力を開始し、2002年12月にミャンマー保健省医学研究局・医科学局と大学間協定を結んだ。06年に当協会が発足。岡山大と協会は協力しながら、10年間にミャンマーから約50人の研修生を受け入れたり、医師らを派遣して研究や手術の指導にあたったりしてきた。

7カ所目の診療所　ヤンゴン郊外に

岡山市中区の品川さん寄贈

協会員の品川美和子さん＝岡山市中区西川原＝がヤンゴン郊外の農村に診療所を寄付。「白ゆりクリニック」と名づけられ、地域医療の中心になる。協会の呼びかけに応じてミャンマーに贈られた診療としては7か所目だ。

ヤンゴン中心部から北へ約30キロのスパカイン村。昔は診療所があったが、それがなくなり、この数十年は無医村だった。12月10日、現地での贈呈式では、品川さんを村民約60人が出迎え、新しい診療所への期待の大きさがみられた。

品川さんは武田和久協会監事に誘われたのがきっかけで、数回ミャンマーを訪れている。式の挨拶で、「皆さんの健康と生命を守るためお役にたてれば幸いです」と話し、こう結んだ。「凛と咲け！正義と幸福の白ゆりよ」

（上）「白ゆりクリニック」前に集まった村民ら＝スパカイン村（下）挨拶する品川さん（左）隣は武田監事

村長は「村民のみんなが感謝しています」と挨拶、「ありがとう」を何度も繰り返した。

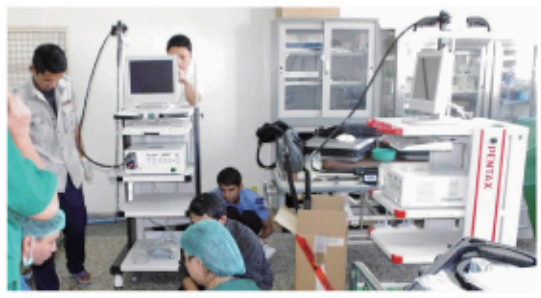
診療所は村民が提供した土地に建ち、鉄骨造り総レンガの平屋建て約150㎡。地区保健省が管理し、助産師、看護師、保健相談員ら5人が常駐、同省所属の医師が巡回して診療に当たる。

式後、品川さんら岡山からの参加者15人は近くの小学校を訪れ、参加できなかった協会員から託されたおもちゃをプレゼントした。子供たちは日本の珍しいアニメのキャラクターを貫って大喜びだった。

HOYA、内視鏡贈る

新ヤンゴン総合病院へ

光学機器メーカーのHOYA（本社・東京）が、最新鋭の医療用内視鏡システム2セット（1500万円相当）をヤンゴンの新ヤンゴン総合病院に贈った。



内視鏡をセットするHOYAの技師と現地医師＝新ヤンゴン総合病院

今年1月、ヤンゴンで催された医学研究会で講演した河原祥朗・岡山大学病院光学医療診療部医師が帰国後、ミャンマーの実態を日本の医療機器メーカーなどに説明。それを聞いたHOYA関係者が協力したいと相談。それを協会の岡田茂理事長がミャンマー側に取り次ぎ実現した。

岡山大・河原医師が紹介

診断数増加を期待

新ヤンゴン総合病院は1980年代に日本のODA（政府開発援助）で建てられた、日本との縁が深い病院。

12月11日、贈呈式が同病院であり、HOYA側からPENTAXライフケア事業部副事業部長の谷島信彰さんらが出席。ミャ・タウン院長らによると、これまでは古い胃カメラしかなく、月に50-100人を診断していた。新システムには大腸ファイバースコープも備えている。操作がしやすく、映像は鮮明になり、受診する患者の苦痛も減り、診断数は大幅に増えると期待していた。

にわか演奏で結婚式盛り上げる

忘れがたいミャンマー

石川　隆俊　理事　東京大学名誉教授

ヴァイオリンを演奏する石川理事＝ヤンゴンのホテル

岡田茂先生が率いる文部科学省の学術研究の班員として、1996年に初めてミャンマー訪問、その後も数回ご一緒させて頂いた。そのころ、両国の関係は、政治的な事情でギクシャクした状況が続いていたが、この共同研究だけは数少ない架け橋であった。先生の努力で日本に留学した若い研究者も多い。ミャンマーの研究者は大変評判がよい。礼儀正しく、努力家で、そして芯の強い国民性が、日本人とどこか共通点があるのかも知れない。

2001年12月にヤンゴンを訪れた時のことである。研究者の仲間の結婚式があり、岡田茂先生とともに招待を受けた。先生は主賓で、大切な儀式を仰せ付けられた。私は結婚式にふさわしい音楽を披露することを考えた。そのころ、旅行するときはヴァイオリンを持参することにしていた。

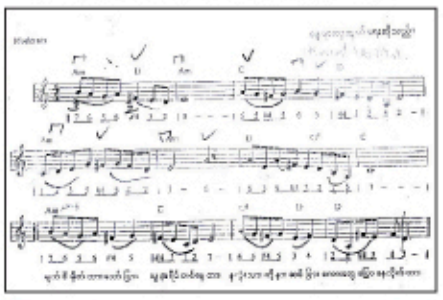
ミャンマーは長いこと英国の影響下にあった。町のつくりも建築も英国式である。多くの人が上手に英語を話す。音楽についてはもちろん、ビルマの民族音楽、舞踊は盛んに行われている。映画「ビルマの竪琴」で水島上等兵が僧侶になって弾いていた16弦のハープは、今でもホテルなどで演奏され、なかなか優雅な音がする。本当のことを言うと、仏に仕えるお坊さんは音楽はやらないようだ。

しかし、英国の影響下にありながら、まだ西洋音楽を教える音楽学校はないと聞いた。私は、結婚式に弾くのにふさわしいミャンマーの曲を探すことを考えた。滞在していたホテルのロビーにピアノがあって、男性のピアニストが時々やって来て、3曲ほどコピーを届けてくれた。そのなかでも、ミャンマーでよく知られた作曲家ハラ・ヒュットの「アラ・チザ・タヤ」は、愛する人の心の美しさをたたえる内容で、結婚式にふさわしいという。

一晩でおさらい

楽譜を見たところ、それほど難しく思えなかったが、どんな感じで弾いていいのか見当がつかない。その上、一晩でさらわなくてはならない。ピアニストにお礼をしてレッスンを頼もうとしたが都合がつかない。そこでホテルの受付のお嬢さんにロビーに集まってもらい、歌ってもらった。映画の主題歌だったそうで、懐かしく、そして穏やかなメロディーに始まり、盛り上がりもあり、ミャンマーの民族音楽が流れていた。

送られてきた手書きの楽譜（一部）



翌日、近くのホテルの結婚式に出かけた。ミャンマーの結婚式は大勢集まる。800ほどの人が、ホテルの広間に集まった。日本と違って、お茶とお菓子を振舞うだけだが、花嫁・花婿はミャンマーの民族衣装の正装で舞台に並んでいる。

結婚式では、雰囲気を盛り上げるために音楽のバンドはなくてはならないものである。式の前に、そのリーダーで、キーボードを担当している男のところにいって、この曲をヴァイオリンで弾いてみたいのだが、伴奏をやってくれないか、とお願いしてみた。その男は、楽譜を見るなり、ひどく驚いて言った。「この曲は、2年前に死んだ私の父が作った曲です。お手伝いしましょう」

伴奏は作曲者の子

結婚式が始まり、岡田先生は正装の民族衣装を着て、花嫁・花婿の首に金色の鎖のような飾りをかける儀式が始められた。ついで、私が紹介された。帽子だけは羽のついた正装用を借りて被り、ヴァイオリンをかかえて壇の上にあがった。帽子の羽の位置が左右逆だったようで、司会者に直してもらったところで、まず笑いが起こった。

花嫁・花婿にお辞儀をしてから、出席者に向かって、英語で、これから伴奏して下さるのは、偶然にも、この曲の作曲者の息子さんであることを紹介してから、弾き始めた。演奏は、上出来ではなかったが、出席者には、何の曲だかすぐわかり、ざわめきが起こった。

後から聞いたところ、伴奏をしてくれた男はこの曲を作曲した父親と同じようにミャンマーで名の知れた作曲家ミャット・ミン氏であった。私のにわか演奏を上手に伴奏でカバーしてくれた。

日本に帰ってから、手紙が届いた。その中に、丁寧な手書きの楽譜が入っていた。「この伴奏パートを作ったので、使ってください。ミャンマーに来ることがあったらお目にかかりましょう」とあった。この曲はとても優しさあふれる曲なので楽譜の一部をつけて紹介した。

広報室から

小さな種ができるとき

先ごろ発表された流行語の中に「維新」という言葉がありました。これは大阪市長の橋下氏によって「日本維新の会」が結成されたことに因みますが、今ミャンマーは民主化が計られた「維新」といえましょう。医学の分野だけでなく、多くの人々が新しい国づくりに懸命になっています。14年前、明治維新を迎えた日本と同じかも知れません。

明治時代には、多くの留学生が外国に行って学び、また有能な技術者や学者を日本に招聘して技術や知識を請いました。さぞかし日本人は貪欲に学んだことでしょう。当時、日本に来た外国人には、エドワード・モースやウイリアム・クラーク、ラフカディオ・ハーンなど日本を愛し、日本の発展に貢献した人が大勢いました。そのお陰で、日本は力を付けることができました。

ところで、ミャンマーからの留学生を指導された先生や、訪れて手術を指導された先生方は、異口同音にミャンマーの医師の熱心さに驚くと言われます。そして「初心を思い出すようだ」とおっしゃられるのを聞くと、教えることで自らも学ぶことがあるのだなあと先生方の虚心坦懐な指導に敬意を表します。これからも互いの友好と発展のために、ご尽力いただきたいと願います。そして、大いにミャンマーの人々と文化を愛して欲しいと思います。

2012年を顧みれば認定NPOとして認められ、立ち上げから6年間の活動が評価されましたことは大変喜ばしいことでした。皆様のおかげをもちまして協会活動がひとつ花を咲かせたように思います。

2013年は癸巳（みずのとみ）の年です。古代中国の思想で、「癸」は原理原則を立て秩序に従って企てを一致協力して進めていくこと、「巳」は頭と体ができかけた胎児を描いたもので、植物の成長で例えれば、花が咲き小さな種ができる時期なのだそうです。まさに、NPOの活動と重なっているようです。一つの花が種となって、次の活動や次の世代に引き継がれることで根が張り株も広がり、大きな森になっていきます。これからも、ご支援賜りますよう心よりお願い申し上げます。（福山支部長　西山 央子）

協会だより

歓迎会に42人

ミャンマー保健省医学研究局の女性医師2人が来日し、歓迎会が10月17日夜、岡山市中区の岡山プラザホテルで催された。

同研究局理事キン・メイ・ウさん（写真右）と上級研究員エイ・エイ・ルインさん（中央）。2人には協会や岡山大学の関係者がミャンマーに訪れるたびに世話になっている。エイ・エイ・ルイン医師は岡大大学院に留学、博士号を取得した。歓迎会には42人が出席し、思い出を語り合った。

診断キットを開発

原野　昭雄さん（はらの・てるお＝協会理事）10月28日、骨髄不全症候群で死去、74歳。岡山大学総合心療内科客員研究員として、ミャンマーに多いサラセミア（遺伝性貧血）と呼ばれる遺伝病を早期に診断するためのDNA抽出キットと遺伝子診断キットを開発。昨年1月にミャンマーへ持ち込み、医師や技師らの指導にあたった。

編集後記

医学交流協定10周年など、ミャンマーでの催しが相次ぎました。多忙を極めたのは理事長で、毎月ミャンマーへ出かけました。「岡山―ヤンゴン間の定期を買ったら」。理事会で、そんな冗談めかした話が出たほどです▼石川理事のエッセイは読み終えて、ヴァイオリンの音色が余韻となって伝わってくるようです。筆者はのちに東大医学部長を経て、退官後、米・ボルチモアの音楽学校に留学。趣味の域を超えたヴァイオリニストでもあります▼原野昭雄理事の訃報に、温和な人柄がしきりに偲ばれます。開発した遺伝病の診断キットについて、ミンガラバー20号（2011年3月15日発行）に寄せた原稿をこう締めくくっています。「彼ら（ミャンマーの医師や技師）の技量で十分使いこなせるかといえばそうとは言えない。そのための研修が必要だろう」。協会にとってもまだまだ活躍してほしい人でした。（西﨑）